

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。  
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。  
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果及び出題に対する反響・意見等についての見解

共通テストを導入して2年目となる今年度の追・再試験においては、本試験と同様に原則として昨年度の出題方針を踏襲し、その問題構成についても変更を加えなかった。すなわち、全体は大問7題から構成されており、第1問から第3問で文法及び語彙の基本的な理解を問い、会話を素材とした第4問、第5問では会話全体の流れ、発話の意図、要点の正確な把握などを多角的に問うことを目指し、読解では第6問、第7問で大意把握や精読など、文章の種類に応じた多様な読みの能力を測ることを意図した。ただし、配点に関しては、読解問題の比重を若干高めて従来の60点から65点に増やし、その変更に応じて発音・文法問題の配点を70点から65点に減らした。会話問題は前年と変わらず、70点のままである。詳細については各問題の報告を参照されたい。

出題に用いたドイツ語の総語数は、本試験と比べて、1割程度増えた。この点について、日本独文学会ドイツ語教育部会（以下「ドイツ語教育部会」という。）より、「語数・語彙数が少なければいいとも一概には言えず、語数が多い場合には、文意を特定の語彙に依存せず文脈で（説明的に）示しやすくできる面もあるため、全般的に読みやすいテキストであったという印象である」という評価を得た。

使用語彙に関しては、例年同様に、高等学校3年間で学ぶ範囲を中心とし、それを超えると考えられるものには注や平易な言い換えなどを利用し、受験者への過度の負担をできる限り回避するよう配慮した。熟語表現や文法項目についても、高等学校3年間の学習を踏まえて理解できるものを中心とするよう留意した。この点について、高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からは、「全体的に口語表現が使われたとしても、状況や場面から類推可能であり、語彙や表現に配慮を感じる」という指摘を頂いた。

なお、平均点等の情報については、追・再試験は受験者が少ないため、公表していない。それゆえ、本試験との難度の違いや過年度の問題との比較は単純にできないが、問題作成に際しては、問題構成・出題数のみならず、難易度についても本試験と同程度であるように努めた。

設問構成と出題形式については、「思考力・、判断力・、表現力等」を含め、ドイツ語を用いたコミュニケーションで問われる多様な能力を測るという目的に沿って検討を重ね決定している。また、設問のテーマに関して、ドイツ語教育部会から「SDGsに関わる環境問題が扱われるなど、日本の高校生にも身近に感じられるテーマ選択がなされており、好印象である」というコメントを頂いた。今後はレベルの更なる適正化を図りたい。

問題構成について、分野別の設問数及び配点は次のとおりである。

発音・文法	第1問～第3問	19問	65点
会話・コミュニケーション	第4問～第5問	14問	70点
読解	第6問～第7問	12問	65点

#### 第1問

第1問は主として単語レベルでの基礎的な発音、文法、語彙の知識を問う問題である。問1～問3は発音に関する問題である。問3は、昨年度同様、選択肢をペアにし、アクセントの位置が比較的単純なドイツ語の特性を踏まえて、問題作成上の工夫を行った。問4、問5は動詞の語形変化の問題である。問6は名詞の複数形を問う問題とした。問7は、日常的に使用頻度の高い名詞の意味に関する知識を問う問題である。教科担当教員からは「動詞や複数形のつくり方など基本的な知識を問う出題」として評価をされた。ドイツ語教育部会からは、「問題構成、設問、難度も本試験と同等」であり、工夫された良問が多いとの評価を得ている。

#### 第2問

第2問は実際にドイツ語を運用する日常的な場面において、文の理解を前提にして個々の文法知識及び使用頻度の高い重要な語彙の知識を問う問題である。文法の知識を正確に運用できるかどうかを識別するため、基本的なものからやや難度が高いものまでを出題し、難易度のバランスを工夫した。教科担当教員からは「広範囲から出題され、文法事項を着実に、正確に学んだ受験者であれば正答を選ぶことができる問題」とのコメントを得た。ドイツ語教育部会から全般に適切な難度であるという評価を受けた。

#### 第3問

第3問は与えられた語を適切に配置させることで、様々な文法知識や熟語表現を多層的に問う問題である。昨年度と同様に今年度も、6つの選択肢のうち5つのみを用いる形を採用した。昨年度は第3問では5問出題していたが、今年度から1問減り設問数が4となった。共通テストの趣旨に鑑み、ドイツ語運用能力を総合的に問うのが目的であり、教科担当教員からも、受験者が文を構成することにより、表現力を問うことができる設問であるという肯定的な評価を得ている。各問題のテーマは、日常的な話題から選び、基本的な語彙を用いた自然で日常的なドイツ語表現になるように配慮した。ドイツ語教育部会からも「語彙の選択と難度は適切である」と評価されている。

#### 第4問

第4問では、昨年度の共通テストと同様、細切れの設問ではなく一連の会話とすることにより、「日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する」場面設定を行った。ドイツ語教育部会からのご指摘にもあるように、「1年間の留学経験を語る内容と、帰国後に知り合ったタンデムパートナーとの会話」という留学を見据えた場面設定にすることで、ドイツ語学習に対する受験者のモチベーションを高めることをねらいとした。

問1は日常会話での決まり文句、問2は会話の内容理解、問3は会話の流れを理解したうえで適切な文を選ぶ問題、問4はdasが示す内容を問う問題、問5は事故の状況をイラストで選ぶ問題、問6は表現の言い換え問題、問7は語彙の把握、問8は会話全体に関する正誤問題であった。

教科担当教員からは「追・再試験の方が本試験よりも読みやすい印象を受けた」とのご意見を頂いた。「登場人物の把握がしやすく、設問の位置も話の流れを障害していない」という点は今後の問題作成にあたっても継承していきたいと考えているが、本試験と追・再試験の難易度

の差については十分留意した問題作成を心掛けたい。

#### 第5問

第5問は、会話にスマートフォンの検索画面を挿入することで、異なるタイプのテキストから構成された問題である。現代では様々なツールを用いてコミュニケーションが行われるため、様々なテキストの種類に慣れてほしいという意図でこのような出題形式にしている。

問1・問2は会話内容およびインターネット記事から適切なイラストを選ぶ問題、問2は基本語彙の把握、問3・問4は会話内容を正確に読み取る問題、問5は会話全体に関する正誤問題である。

ドイツ語教育部会からは、「昨今日本でも話題に挙がるトピックであるため受験者にも馴染みがある可能性もあることから、難度は適切であるといえる」との評価を頂いた。高校でのドイツ語教育の成果を生かせる設問となるよう今後とも努力したい。

#### 第6問

第6問と第7問が読解問題となっているが、それぞれの設問で用いるテキストを別の文体のもの（今次においては第6問で物語、第7問で学術的な内容の記事）を用いた。これは、CEFR準拠外国語能力試験などで問われる現実のコミュニケーションで必要になる読解力要素を中心に、多角的に受験者のドイツ語力を測ることを目的としている。

まず、第6問については、本文で用いられている動詞の過去形にやや難度の高いものも含まれていた（rief, trugなど）。過去形の修得も必要とは考えているが、高等学校での学びの実態を鑑みてどの程度まで許容するのかを引き続き検討していきたい。

問1の出来事の順序を考える設問はやはりやや難しかったようである。単純に本文で触れられている順序とは一致しないという点も含めて、総合的な読解力が問われる問題となっている。

問2のイラスト問題については、解答の判断には必要ない部分は統一すべきではないかという意見も頂いた。ただ、この問題に関して例えばサングラスと帽子の有無だけの違いであれば、受験者はピンポイントでその単語だけを探して解答することも可能となってしまう。テキストのより広い部分をチェックしたうえで正答にたどり着いてもらいたいと考えている。しかしながら、2つの項目の有無だけの違いであっても、テキストや設問を工夫することで、上記の例のようなピンポイントで単語を見つけて解答するのではなく、より広い部分をチェックしなければ解答できない問題の作成も可能かもしれない。本問についてはさらに工夫と検討を重ねたい。

#### 第7問

第7問では、それぞれの段落の理解に加え、文章全体の大意を問うことを目指した。また多くの問題において設問及び選択肢の両者をドイツ語にすることで、一つの内容をドイツ語の複数の言い方で理解・表現できる能力を測ることも狙っている。

テキストの選定においては、第4～6問とは異なる読解力を測るため、学術的なものを選んだが、受験者になるべく親しみやすいものと考え、スポーツがテーマのものを選定した。

いくつかの語句の難易度が指摘されたが、ドイツ語教育部会からは「入試問題として全体的に適切な難度にまとまっている」というコメントを頂いた。教科担当教員からは「受験者にも取り組みやすいように、使用語彙に配慮がなされている」と評価されており、テキスト全体としての難易度は適切だったと考えられる。

教科担当教員と教育部会の双方から難易度が高いとご指摘いただいたのは問4で、特に「Konflikt」と「Lebensbereiche」の二つの単語の難度が指摘された。このうち「Konflikt」はGoethe-ZertifikatのB1レベルの単語であることに加え、英語からの類推も可能である。また「Bereich」

も同じく B 1 レベルの単語であることに加え、本文と正答の選択肢の両方に「Lebensbereiche」が出てくることから、十分正答可能な問題であると考えられる。一方で、どのレベルの単語を使うかの検討は、現場の教員の見解や使用している教科書の内容等を参考に、そこから乖離しないよう引き続き検討していきたい。

また日本語で問う問 6 については、本試験のほうで「設問、選択肢ともにドイツ語でもよかったかもしれない」とのご意見をいただいたが、ここでは日本語の設問と選択肢を通して、少々難解な個所の理解を助け、大意の把握の理解ができたかを問うことを目指していることと、全体の難度を調節するために、このような形式とした。

### 3 ま と め

現行の学習指導要領においては、英語以外の外国語に関する科目は「英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うもの」とされ、当該諸言語に応じた明確な指導目標が存在しないなか、事実上共通テストが高等学校の学習目標となっている点に鑑み、問題作成分科会としてはドイツ語学習者の裾野を広げるためにも、問題内容と形式、レベルとバランスに配慮しつつ、さらに良問の作成に向けて努力を続けていく所存である。